

道連ニュース

2026年1月号 No.229

北海道生活協同組合連合会

〒003-0803 札幌市白石区菊水3条4丁目1-3
こくみん共済c o o p 北海道会館内
TEL 011-841-8601 FAX 011-841-8605
URL : <http://www.doren.coop>



2026年
北海道生協連

新年のご挨拶

北海道生活協同組合連合会
会長理事 中島 則裕

新年あけましておめでとうございます。

2026年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

本年も、会員生協の皆様の事業活動への貢献を通して、北海道の暮らしに貢献できるよう、役職員一同、全力で取り組んでまいります。

今、私たちは、世界的な物価高や国際社会の複雑化、紛争の継続、自然災害の拡大といったグローバルな課題に加え、北海道の少子高齢化・人手不足という地域特有の課題にも直面し、大きな社会の転換点に立たされています。何よりも痛感するのは、「分断」と「格差」が世界的に、そして私たちの地域においても、静かに、しかし確実に広がっているという現実です。世界経済の構造が生まれ出した、少数の富裕層への富の集中と、それがもたらす異常な格差の拡大が常態化し、この状況は、「みんなで幸せにくらす社会」を遠ざけてしまうと考えます。

だからこそ、格差ではなく公平を、分断ではなく協調を目指し、持続可能で豊かな社会を築く基盤を担う協同組合の「共助の精神」と地域での実践活動こそが、この危機を乗り越える確かな指針となることを確信しています。平和、よりよい社会を目指すための理念は数多くありますが、その実現への一番の近道は、人々、そして各団体（企業、NPOなど）、行政等が連携・協働することです。そして、この連携を通じて分断された社会に「協同」の経済・社会を広げることだと考えます。今一度、協同組合の理念の具現化に向けて、人と人のつながりをもう一段力強いものにしていきたいと強く願います。

協同組合運動は、長きにわたり協同の力、つながりの力を信じ、組合員、地域社会への貢献を続けてきました。北海道生協連も、協同組合間協同を推進すべく、「協同組合ネット北海道」の連携活動に、主体的に取り組み、連携の輪を広げることに努めてきました。また、地域や社会課題に自ら主体的に取り組む方々を支援することにも注力してきました。

2025年度は、「国際協同組合年（IYC2025）」の成果を確かなものとするため、「子ども食堂の拡充」「若者支援

の強化」「協同組合ネット北海道の活性化」を重点テーマに進めてまいりました。特に、子ども食堂は活動拠点が道内410カ所超に拡大するとともに、「子どもの居場所づくり応援基金」を設立・稼働し、活動の安定化に貢献しました。また、「ほっかいどう若者応援★学生プロジェクト」では登録者が119名（30校）に増加し、次世代の地域活動の担い手が着実に育っています。さらに、協同組合ネット北海道では、学生向けの北海道協同組合就活サミット2025や北海道大学講座（フレッシュマンセミナー）への応募が大幅に増えるなど、未来の人材育成と次世代への理念理解促進が進みました。このように、地域、社会課題の解決に自ら行動する方々が確実に増えていることは、本当に素晴らしいことだと感じています。

2026年度 創立70周年を迎える 重点方針：協同の力を社会へ



2026年度は創立70周年という重要な節目です。私たちは、これまでの取り組みを「定着」させ、その価値を社会へ「拡大・発信」することで、私たちが目指す「共助の社会づくり」を一層推進します。創立70周年記念事業成功に向け、特に以下の活動に注力します。

- 「子ども食堂」の拡充と充実：基金の本格運用を軸に、道内子ども食堂の500カ所体制（3年計画）実現を強力に後押しし、「共助」のインフラとして定着させます。
- 「若者（学生プロジェクト）支援の強化」：学生たちの主体的な活動を全面的に支援し、「共助の社会づくり」の未来を担う「次世代のリーダー」育成に貢献します。
- 協同組合ネット北海道の協働活動推進：70周年記念事業の成功を協同組合間協同の具体的な成果として結実させます。農業団体などとの連携を強化した「生産者×消費者の協同事業」にも取り組み、「協同組合経済、社会を広げる」多様な協働事業を追求します。

2026年度は、北海道生協連のこれまでの歴史と実績を土台とし、さらなる進化が求められる重要な転換点となります。私たちは、「格差」と「分断」の危機に対し、地域に根ざした多様な実践が「協同組合経済・社会」を広げていくよう、その活動を力強く後押し、支えることを通して、「共助の社会」の実現を目指してまいります。

会員生協の皆様、そして協同組合ネット北海道の仲間たちとともに、この重要な一年を、知恵と情熱を結集してまいります。本年が、皆様の事業活動において、飛躍の年となるよう、心よりお祈り申し上げます。

食べるたいせつフェスティバル2025

野菜の「カタチ」再発見！世界に一つのエコバッグづくり

～ほっかいどう若者応援★学生プロジェクトワークショップ活動報告～

1. 热気に包まれた札幌ドーム

2025年11月22日(土)、初雪の便りも届き始めた札幌の朝。しかし、会場となった「大和ハウス プレミストドーム（札幌ドーム）」の中は、外の寒さを忘れさせるほどの熱気に包まれていました。コーポさっぽろが主催する「食べるたいせつフェスティバル2025」は、食の安全や大切さを楽しく学ぶ全道規模の一大イベントです。今年度は全道8会場で開催され、この札幌会

場がそのフィナーレを飾りました。当日の来場者数はなんと14,231人。全道合計では35,924人の親子連れが参加されたとのことで、改めて食に対する道民の関心の高さと、このイベントの規模の大きさに圧倒されました。私たち「ほっかいどう若者応援★学生プロジェクト」は、昨年に引き続きこの素晴らしいイベントに出展させていただきました。メンバー20名が一丸となり、準備から当日の運営まで駆け抜けた一日の様子をご報告します。



2. ブース紹介：「野菜スタンプの模様であそぼう！～マイエコバッグづくり～」



私たちが企画したのは、野菜の切れ端（端材）をスタンプとして使い、無地のエコバッグに自分だけの模様をデザインするワークショップです。この企画の目的は単なる工作ではありません。「野菜の断面ってこんな形なんだ」「野菜って面白い！」という発見を通じ、子供たちの食への興味・関心を高めること、そして捨てられてしまう野菜の活用を通じて「もったいない」の精神やエコについて楽しく学んでもらうことを目指しました。





対象は3歳児から小学生まで。1回30分の体験を計7クール実施し、各回定員12名、合計で約100名近い子供たちとの交流を予定して臨みました。

9時45分の開場とともに、ドーム内にはたくさんの家族連れが溢れかえりました。私たちも負けじとブースの前で呼び込みを開始します。「野菜でスタンプしてみない?」「自分だけのバッグが作れるよ!」私たちが事前に試作したカラフルなエコバッグを掲げると、通りがかった子供たちの目は釘付けに。「これ、どうやってやるの?」「僕も作りたい!」と、予想以上の反響がありました。

野菜の断面が作り出す不思議な模様や、自分で自由にデザインできるという点が子供たちの創作意欲を刺激したようです。あっという間に整理券が配られ、ブースは常に各クールとも満員御礼の状態となりました。

4. 「食育クイズ」でアイスブレイク

ワークショップは、ただ作るだけではありません。まずは導入として「野菜クイズ」を行いました。「どっちがキャベツで、どっちがレタスかわかるかな?」「レンコンに穴が開いている理由はなんでしょう?」

特に盛り上がったのがレンコンのクイズです。実際にレンコンの断面を見せながら問いかけると、子供たちは真剣な表情で考え込みます。「息をするため!」「見通しを良くするため?」など、ユニークな回答が飛び交いました。答え合わせをして、実際に穴の空いた様子を観察すると、「なるほど~!」「知らなかった!」と納得の声が。 実物を目の前にすることで、普段何気なく食べている野菜の「生態」や「不思議」に触れ、子



供たちの目が輝き始める瞬間でした。少し緊張気味だった会場の空気が、このクイズを通じて一気に和やかになり、いよいよ本番のバッグ作りへと移ります。

5. 十人十色の感性が爆発! エコバッグ制作



「さあ、好きな野菜を選んで、自由に押してみよう!」クイズの時間は少し退屈そうにしていた子も、いざ制作が始まると表情が一変します。チングン菜、オクラ、レンコン、シイタケ、ピーマン……。用意された野菜の切れ端に布用インクをつけ、真っ白なキャンバス(エコバッグ)に向かう子供たちの真剣な表情が今でも目に浮かびます。

制作の様子を見ていると、子供たちの自由な発想に私たち学生が驚かされることばかりでした。絵柄を決めずに直感でポンポンとリズミカルに押していく子、特定の色にこだわって幾何学模様を作る子。中には、複数の野菜を組み合わせて一つの絵画のように仕上げる子もいました。

特に印象深かったのは、チンゲン菜とオクラの断面を組み合わせて「薔薇の花」を表現していた子や、シイタケの独特な網目模様を活かして「草木や森」を表現していた子です。「野菜=食べるもの」という固定

観念がない子供たちにとって、野菜の断面は魅力的なアート素材なのだと気づかされました。完成したバッグはどれも、世界に一つだけの素晴らしい芸術作品でした。

6. 保護者の方との対話で気づいた「つながり」

今回の活動では、子供たちだけでなく、その様子を見守る保護者の方々とも多くの言葉を交わすことができました。ある親御さんが、完成したバッグを嬉しそうに持つお子さんを見ながら、私にこう声をかけてくださいました。「こうしていろいろな場所に行って、たくさんの人と触れ合うことは、学生さんにとっても楽しくもあり、とても大切なことですよね」

その言葉を聞いた瞬間、私たちは「子供たちに楽しんでもらおう」「食育を伝えよう」という思いで運営

していましたが、実は私たち自身も、この活動を通じて地域の方々と触れ合い、普段の大学生活では得られない貴重な学びを得ているのだと改めて実感しました。

何気なく過ごしていたら出会うことのなかった親子との出会い。野菜スタンプを通じて生まれた笑顔や会話。こうした「人とのつながり」そのものが、ほっかいどう若者応援学生プロジェクトが活動する大きな意義なのだと、ストンと腑に落ちた気がしました。

7. おわりに

全7クール、92名の子供たちとのワークショップは、忙しさの中にも充実感があふれる素晴らしい時間となりました。子供たちの手によって多彩スタンプが様々な模様、デザインに変化し素敵な作品に生まれ変わるプロセスは、まさに「食べるたいせつ」そして「物を大切にする心」を体現していくように思います。

参加してくれた子供たちが、家に帰ってから自分で作ったエコバッグを見て、「あ、これはレンコンの形だね」「今日の晩御飯にも入っているかな?」と、食卓で野菜の話をしてくれていたら、これほど嬉しいことはありません。

今回のフェスティバルで得た経験や、保護者の方からいただいた温かい言葉を胸に、これからも私たち学生プロジェクトは、食を通じて地域とつながり、多くの笑顔を生み出せるような活動を続けていきたいと思います。



ご来場いただいた皆様、そして運営をサポートしてくださいました関係者の皆様、本当にありがとうございました。



愛媛と北海道、協同組合の絆をオンラインで結ぶ！

～IYC2025記念「愛媛・北海道 交流集会」開催～



日時 令和7年11月14日(金) 13:30~16:30

場所 愛媛農協学園2階大研修室 × 場所 北農ビル19階 役員会議室
(松山市東野4丁目227-2) (札幌市中央区北4条西1丁目)



国際協同組合年（IYC2025）の記念事業として、愛媛県と北海道の協同組合関係者がオンラインで一堂に会する「愛媛・北海道 交流集会」が開催されました。県域を超えた初の交流会として、非常に貴重な機会となりました。

○ 活発な活動報告 集会では、双方の組織から特色ある取り組みが報告されました。

● 愛媛県協同組合協議会から

- JAにしうわ：農繁期が異なる沖縄のJAと連携し、産地間で「援農ボランティア」を派遣しあう取り組みが紹介されました。
- 愛媛漁協：宇和海や瀬戸内海を守るために、地道な環境保全活動について報告がありました。

● 協同組合ネット北海道から

- 「ゆるやか、あいのり、やってみる」をスローガンに掲げた、6つの独自企画が紹介されました。（2024年度独自事業・連携事業のスライド動画も使用）
- 北海道からの活動紹介
 - 北海道大学講座(フレッシュマンセミナー)の実施
 - 北海道協同組合就活サミットの開催
 - 国際協同組合年事業：「子どもの居場所づくり応援基金」の設立
 - 国際協同組合年事業：北海道まるごとカレーパンの取組み
 - 国際協同組合年事業：記念講演会開催
 - 協同組合間学習・交流会の実施

○ グループディスカッションと今後の展開 双方の取り組みについて理解を深めるため、グループディスカッションの時間も設けられました。オンラインでの開催でしたが、互いの知見を共有し、新たな繋がりを築く、非常に意義深い交流会となりました。



地域をつなぐ、温かな光に。

「子どもの居場所づくり応援基金」寄贈式を開催

2025年12月12日(金)、北海道労働金庫役員会議室(札幌市中央区)にて、協同組合ネット北海道による初の「子どもの居場所づくり応援基金」の寄贈式が執り行われました。

「子どもの居場所づくり応援基金」は、子ども食堂などの立ち上げや運営を支援し、希薄化する地域コミュニティを再び「つなぐ」ことを目的に設立されたものです。

本基金の財源には、この趣旨に深く賛同いただいた関係団体の皆様からの多大なるご寄付が活用されています。



右から横田室長(北海道労金)、平專務(北海道生協連)、千葉副理事長(北海道労金)、角谷様(八軒中央町内会 子どもの家)、佐々木様(よるカフェ)、三好様(一般社団法人 haconiwa)、長谷川課長(ホクレン)

寄贈式当日は、厳正なる審査を経て選出された道内こども食堂4団体のうち、当時は3団体が出席しました。協同組合ネット北海道 子どもの居場所づくり応援基金運営委員会の千葉利裕副運営委員長(北海道労働金庫副理事長)より、各団体へ10万円の目録が手渡されました。



よるカフェ 佐々木様



八軒中央町内会 子どもの家 角谷様



一般社団法人 haconiwa 三好様

また、北海道農業協同組合中央会様、ホクレン農業協同組合連合会様、北海道信用農業協同組合連合会様、全国共済農業協同組合連合会北海道本部様より、それぞれ20万円の温かいご支援をいただきました。協同組合間の連携が生んだこの資金は、地域の子どもたちの笑顔を守るために活動に直接役立てられます。



北海道信用農業協同組合連合会様



北海道農業協同組合中央会様
ホクレン農業協同組合連合会様



全国共済農業協同組合連合会北海道本部様



寄贈式に当日出席をされた3団体の活動内容と、 代表者様よりいただいた喜びと決意の言葉をご紹介します。

① よるカフェ（札幌市豊平区）

夕食を共にする「共食」や学習支援を通じ、家庭や学校以外の「第三の居場所」づくりを目指す団体です。

代表 佐々木 敦子 様のご挨拶

「夜ごはんを共にすることで、地域の方や子どもたちが自然に交流できる、そんな憩いの場として利用してほしいと願っています。ここは学校や家庭以外の居場所のひとつです。人とつながるきっかけをつくり、学習する場所としても役立てていきたいです。いただいた助成金は、食材費や皆が集まる場所の経費、そして夏に向けて子どもたちが快適に過ごせるよう、冷房環境を整えるために大切に使わせていただきます」

② ハ軒中央町内会 子どもの家（札幌市西区）

町内会が運営主体となり、地域全体で子どもたちを見守る活動を行っています。2025年10月に設立されたばかりの新しい拠点です。

代表 角谷 知也 様のご挨拶

「私たちの目標は、地域の子どもたちが安心して過ごせる場所を作ることです。家庭の状況に関わらず、子どもたちを決して飢えさせない、その一心で取り組んでいます。おいしくて栄養満点の食事を提供し、お腹いっぱい食べさせてあげたい。そして、鍵っ子で寂しい思いをしている子どもたちを笑顔にしたいと考えています。皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます」

③ 一般社団法人 haconiwa

（札幌市中央区・余市町）

札幌市すすきので有機野菜を使った「ハコニワ食堂」を運営し、多世代が交流できる場を提供してきました。今回は余市町での新拠点立ち上げに伴う支援となります。

代表 三好 加織 様のご挨拶

「これまで札幌ですすきの地区を中心に、子どもから高齢者までが安心して集える場を運営してまいりました。今後は余市町の『カフェ double』を拠点に、孤立しやすい子どもや大人がつながり、心の豊かさを取り戻せる居場所を実現したいと考えています。助成金は、有機・無添加の食材費や、安心・安全な調理環境を整えるための器具購入などに充てさせていただきます」

各代表からは、支援への感謝とともに、地域課題解決へ向けた具体的なビジョンが語られました。協同組合ネット北海道は、今後も「連帯」の力で地域を支え、支援の輪を広げてまいります。

11月11日(火)

北海道・東北地区行政・生協連絡会議

in 岩手県

岩手県エスパワールいわて大ホールを会場に該当地域の行政・生協連が参集し、中島会長・平専務が参加致しました。

主催者の岩手県・岩手県生協連のご挨拶の後、厚生労働省社会援護局福祉基盤課 消費生活協同組合業務室 佐藤 美雄室長補佐より、生協との間の自然災害に対する尽力に対し感謝いただくとともに共生社会の実現に向け、生協の事業や社会貢献活動は、重要になってるので、その充実に期待するとのご挨拶がありました。

基調講演は、インクルいわて山尾理事長より「孤立させない地域社会づくりの実践と仕組みづくり～岩手の事例、生協への期待」として、「家族のカタチにかかわらず、誰もが生き生きと暮らししていける包摂された社会の実現」を目指し、震災後、ひとり親家庭への支援のために活動を開始し、みずからも、こども食堂の運営を実践、併せて官民連携の子ども食堂ネットワークに尽力。企業や学生に対して支援だけでなく、企業の体験や大学の体験とリンクした「しゃいん食堂」「がくせい食堂」を実施し、単に食事提供だけでなく、働くことや将来の進路を考える機会の場を提供する取り組みも紹介されました。親の悩みを交流する時間の間、学生ボランティアが子どもと遊ぶ企画など、大人も地域も育つ「居場所」としての役割にもなっていることが紹介されました。

その後、「住み続けられる地域のため、行政と生協の協力や取り組み事例」について各県より報告がなされました。

北海道からは、(行政)消費者被害防止ネットワークと消費者安全確保地域協議会の報告(道生協連) コープさっぽろ健康診断事業やスクールランチ事業の進捗、子どもの居場所づくり応援基金の立ち上げ、ほっかいどう若者応援★学生プロジェクトを報告しました。

青森県からは消費者被害防止のための生協との連携、コープあおもりと三戸町の連携、秋田県は豪雨災害のお見舞い活動、SDGs フェスティバル開催、宮城県は生協役職員研修会における県部署との交流、山形県はエシカル消費フェスタ、県企画での連携、社協と坂田生協のフードドライブ事例、福島県よりエシカル消費の推進や食の安全に関する生協との連携。

岩手県からは、エシカル消費に関する企業の取り組みでの生協の協力について報告がなされました。